

導入樹種がワオキツネザルの生態に与える影響

——マダガスカル、ベレンティ保護区において——

平成 12 年入学

派遣先国：マダガスカル共和国

相馬 貴代

キーワード：ワオキツネザル、導入樹種、採食生態学、脱毛症、個体数減少、出産率

対象とする問題の概要

アフリカ諸地域においては、エコツーリズムは動物保護のための資金源としてその将来性を期待されている。マダガスカルにおいては、大小合わせて約 60 の保護区があるが、長期にわたる動物の生態研究を保護区管理の施策に反映させる試みはあまり例がない。地域住民とのかかわり、行政からの働きかけなどの人側からの研究に加えて、長期にわたる動物側からの研究も保護区管理にはかかせないといえるだろう。

研究目的

キツネザル類を始め、沢山の固有種が生息するマダガスカルにおいては、近年エコツーリズムは新たな注目を浴び、国立公園から私設保護区にいたるまで多くの保護区が設立されている。しかし、森林の伐採と分断化がすすむこの国では、小規模な保護区が多く、エコツーリズムと動物の生態との調和がとれた管理がされているとは言い難い。本研究は、小規模保護区における人間の活動が、動物の生態に与える影響を定量的な観察データに基づいて明らかにし、適切な保護区管理を考えることを目的とする。

フィールドワークから得られた知見について

マダガスカル南東部の Berenty 私設保護区において調査は行われた。総面積 240Ha の調査地にはワオキツネザル (*Lemur catta* 写真 1) をはじめ、3 種の昼行性、3 種の夜行性のキツネザルが生息している。年間 1 万人という、国内でもっとも多い観光客を集めるこの保護区は厳格に管理が行き届き、キツネザルの生息数も多いが、近年ワオキツネザルの脱毛 (写真 3) など、健康状態の悪化が懸念されてきた。脱毛の原因には、導入されたマメ科のギンネム (*Leucaena leucocephala* 写真 2) の採食説が有力とされる。2005 年までに行われた申請者の調査結果は、このギンネム採食仮説を支持するものであった。



写真 1 ワオキツネザル



写真 2 ギンネム
(*Leucaena leucocephala*)

この結果をうけ、Berenty 保護区では、2007 年にギンネムの一斉伐採が行われ、ワオキツネザルの脱毛状態も小康状態になったとされた。今回の調査では、ギンネム伐採後のワオキツネザルの①生息数、②脱毛状態、③出産状況を調べた。結果は、①生息数に関しては、昨年まで上昇傾向にあったものが急激に減少した（図 1）。②脱毛状態は改善がみられた。③出産された新生児の数は減少した。

ギンネムはタンパク質が豊富で繊維分が少なく、ワオキツネザルに好まれる採食樹種である。特に果実の少ない乾季によく利用されるギンネムが伐採されたことは、ワオキツネザルの生息数と出産に影響を与えていたかもしれない。また、本年は、主要採食品目であるタマリンド (*Tamarindus indica*) の果実が不作であったので、この影響も考慮に入れる必要があるだろう。脱毛状態はギンネムが存在していた昨年度よりも改善が見られたため、ギンネムの排除の効果がでていられると思われる。出産数が減少したのは、出産可能なオトナメスの生息数自体が減少したことも原因の一つであるが、近年出産しない若いオトナメスもいることも無視できない要因であろう。



写真 3 脱毛キツネザル(市野進一郎撮影)

今後の展開・反省点

今回の結果においては、ギンネム伐採後のワオキツネザルの生息数の減少がみられたが、1 期限りの調査では、影響と断定するのは困難である。Berenty 保護区におけるワオキツネザルの生息数の調査は、申請者も所属する小山直樹京大名誉教授隊が 1989 年からおよそ 20 年にわたって継続して行ってきた。これに加えてさらなる継続調査が必要といえよう。これからの課題としては、ギンネム伐採後の採食樹種や摂取栄養量の変化を定量的な調査が必要になってくるだろう。また、この保護区には導入されたチャイロキツネザルも生息しており、採食場所においてチャイロキツネザルからワオキツネザルへのハラメントなどが観察され、2 種による採食競合が懸念されている。チャイロキツネザルの行動がワオキツネザルの生態に与える影響も、調査する必要があるだろう。